

## 『三國演義』版本の研究

— 毛宗崗本の成立過程 —

中 川 論

## 序

中國を代表する一大長篇歴史大河小説『三國演義』が、長期にわたって非常に高い人氣を保ち続けていることはいまさら言うまでもあるまい。その出版は萬曆年間以降特に活發になり、現在各種の版本が殘本を含めて世界各地に残っている。孫楷第『中國通俗小説書目』には、二十八種類の『三國演義』の版本が著録されており、この他にも數種の版本の存在が確認されている。明代以降いかに『三國演義』が流行していたかが、現存する版本の種類からだけでも十分窺うことができよう。

ところでこの『三國演義』の多様な版本のうち、これまで最も古くしかも羅貫中の原作に最も近いとされてきた版本は、弘治甲寅(七年、西曆一四九四年)庸愚子の序・嘉靖壬午(元年、一五二二)修髯子の引を冒頭に附するいわ

ゆる嘉靖本であり、最も廣く普及した通行本は『四大奇書第一種』あるいは『第一才子書』と題される毛宗崗批評本である。従來『三國演義』の版本について、嘉靖本以後の諸本はすべて嘉靖本を祖本とし、外見上に變化があつただけで内容にはまったく違いはなく、清代に至り毛宗崗によつてはじめて大きく改められた、と信じられてきた。この見解は鄭振鐸に始まる。鄭振鐸は「三國志演義的演化」の中で、嘉靖本と毛宗崗本成立以前の諸本の違いとして、①圖を加える・②卷數や回數が異なる・③批評を加える・④「按鑑」の増補・⑤周靜軒詩の加入、の五つの點を挙げたあと、次のように述べている。

以上五點、皆是萬曆以後出現的諸本、與嘉靖本面目上有所不同的所在。然其不同、究竟不過在面目上而已、內容實在一無差別。(傍點筆者)

これ以後、『三國演義』の版本研究といえば、嘉靖本と毛宗

岡本を比較することによって、兩者の違いや毛宗崗の修訂方法をとらえようとするのが主流であった。それに對し小川環樹博士は、毛宗崗本成立以前の段階において、嘉靖本には見られない關羽の三男關索の說話が挿入され、その關索の說話について違つた形を傳える異本も存在する、と指摘された。

小川博士の説によれば、少なくとも關索說話については嘉靖本と毛宗崗本以前の諸版本の間ですでに内容の違いが生じているといえる。この點だけでも鄭振鐸以來の定説に對して疑問が生ずるのであるが、嘉靖本以後毛宗崗本成立以前の段階で、關索說話以外にも内容の違いが存在しているのではないだろうか。文章・文字に至っては内容以上の違いが生じているのではないだろうか。もしそうだとすると、毛宗崗本が直接嘉靖本から出たものでない以上、毛宗崗本の成立を考察していくにあたって、ただ嘉靖本と毛宗崗本のみを比較検討するのではなく、嘉靖本以後毛宗崗本以前の諸本の段階における演變を検討しなければなるまい。本稿では數多く現存する『三國演義』諸版本のうち、次の五つに的をしぼり、各版本の内容と文章を細かく検討することを通して、毛宗崗本が成立していく過程を考察する。

- 一、三國志通俗演義 二十四卷。〔嘉靖本〕
- 二、新刻校正古本大字音釋三國志通俗演義 十二卷。金陵周

- 曰校刊。内閣文庫・蓬左文庫藏。その他、宮城縣圖書館伊達文庫に卷九―十二を藏する。書頭に萬曆辛卯（十九年、一五九一）の周曰校の識あり。〔周曰校本〕
- 三、李卓吾先生批評三國志 一百二十回 〔吳觀明本〕
- 四、繡像三國志演義第一才子書 六十卷一百二十回 〔毛宗崗批評本〕
- 五、新刻按鑑全像批評三國志傳 二十卷。〔余象斗本〕

これら五種の版本を比較することにより、周曰校本―吳觀明本そして毛宗崗本という系列を想定して、毛宗崗本が成立するまでにはいくつかの段階があつたこと、さらに余象斗本をはじめとする建安二十卷本<sup>(6)</sup>は毛宗崗本が成立していく上で別系統に位置する版本群であることを明らかにしていこうと思う。

一

毛宗崗本首卷に附される「凡例」によれば、毛宗崗本は「古本」によつて「俗本」に修訂を加えたテキストであると稱している。この「古本」の存在が信頼できないことについて、小川博士は、

このような改訂（毛宗崗による改訂——筆者）は、すべて「古本」によつたと稱するが、新しい改訂本を古本とよぶは明以來、戯曲や小説の批評家の常習の手段であつた。

と述べておられる。したがって毛宗崗本の直接の底本となつたのは「凡例」中にいう「俗本」であろう。そこで毛宗崗本の「凡例」に基づいて「俗本」の體裁を考えてみる。毛宗崗本凡例では十項目にわたり「俗本」の體裁について述べている。その十項目は次のようにまとめられよう。

- (一) 助字の使い方が杜撰で表現がくだい。
  - (二) 記事に誤りがある。
  - (三) いくつかの欠かすことのできない記事が欠けている。
  - (四) 「文選」の中に收められるすばらしい文章が欠けている。
  - (五) 一回が二則に分かれ、題もふざろい。
  - (六) 李卓吾先生批閱と稱し、劉備や諸葛孔明を悪く言つた批評がある。
  - (七) よい事がらには圈點を施し、悪い事がらには「塗抹」している。
  - (八) 周靜軒の詩がいたるところにある。
  - (九) 後人が捏造した、三國時代の人物作と稱する七言律詩がある。
  - (十) 後人が捏造した誤つた記事がある。
- このうち第六條こそが、鄭振鐸以來毛宗崗本の底本は「李卓吾先生批評本」だと言われ續けてきた唯一の理由であつた。それでは「李卓吾批評」を掲げた『三國演義』にはど

のような版本があるのだろうか。孫楷第『中國通俗小説書目』によれば、李卓吾先生批評の『三國演義』には次の五つがある。

- (一) 煙水散人編次本 (二十卷二百四十則)
- (二) 建陽吳觀明刊本 (百二十回不分卷)
- (三) 吳郡寶翰樓刊本 (百二十回不分卷)
- (四) 吳郡綠蔭堂刊本 (百二十回不分卷)
- (五) 吳郡蔡光樓槐堂刊本 (百二十回不分卷)

このうち煙水散人編次本は、孫楷第も未見、現在も所在不明であり、また「三國志傳」と題する二十卷本で回数で分かれていないことが毛宗崗本の直接の祖本たる條件(凡例第五條)にあわないので、考察の対象からははずすことにする。残り四種の『李卓吾先生批評三國志』の中でいちばん古い刊行とされるのは吳觀明本である。この吳觀明本が毛宗崗本凡例に列擧された條件に合うかどうかを検討してみたい。吳觀明本が「李卓吾批評」を稱していることは自明であるが、その批評の中には確かに劉備や諸葛孔明を悪く言つた批評が見られる。たとえば、劉備について「大奸處」(吳本第十一回)といったり、諸葛孔明に對して「孔明的是大賊」(吳本第五十一回)といった批評が吳觀明本の批評中に散見される。

次に、凡例第七條に見える「圈點」と「塗抹」について

はどうだろうか。呉観明本第二回「何進謀殺十常侍」には次のような文章がある。(圈點・傍線は原文のまま。)

宮門外欄住的、乃是司徒陳耽。遷入宮中、來諫天子曰、「劉諫義、得何罪而賜誅戮。」帝曰、「毀謗大臣、冒瀆朕躬。」耽曰、「天下人民欲食十常侍之肉、陛下敬如父母、豈有此理。且十常侍、身無寸功、皆封列侯。況封諸等、結連黃巾、欲爲内亂。陛下今不自省、漢社稷、立見崩摧矣。」帝曰、「封諸作亂、其事不明。十常侍中、豈無一二忠臣。」陳耽以頭撞階而諫。帝怒、命牽出、與劉陶皆下獄中、是夜俱謀殺之。

ここで、國を亂した元凶の十常侍を處分するよう訴えた陳耽の諫言——すなわち「事の是なる者」には圈點が施され、十常侍をかばつたり諫言した劉陶・陳耽を逆に死刑に處した靈帝のことばや行爲——「事の非なる者」には傍線が引かれている。このような圈點や傍線は呉観明本のいたるところで見ることができ、すなわち毛宗崗本凡例第七條に見える「圈點」・「塗抹」が呉観明本に存在しているのである。「塗抹」とは本文の記事に傍線を施すことであろう。

以上の他、呉観明本には周靜軒の詩が往々に見られる。また百二十回仕立てで各回が前後二則に分かれており、そしてそれぞれの則ごとに題がついている。さらに第二條に指摘のある記事の誤り、第三條・四條で指摘の記事・文章の不足、第九條・十條で指摘の後人が捏造した七言律詩や

記事の挿入、どれも呉観明本にあてはまる。第一條に指摘のある助字についても、呉観明本と毛宗崗本の本文を比べたときに、毛宗崗本では呉観明本の文章中の助字がいたるところで削られたり直されたりしている。したがって呉観明本は、毛宗崗本凡例に挙げられた、事實上の底本に違くない「俗本」の條件をすべて満たすことになる。

残りの三種、寶翰樓本・綠蔭堂本・榮光樓楠槐堂本のうち、綠蔭堂本は清代になってからの呉観明本の覆刻なので、その體裁・内容はほぼ呉観明本と同じである。綠蔭堂本の刊行年については、その冒頭にある戴易の「書富春東觀山漢前將軍壯繆關侯祠壁」と題される文章中に「予於庚戌二月肅、謁侯祠……」という記述があり、ここから綠蔭堂本の刊行は「庚戌」すなわち康熙九年(一六七〇)よりも遅れると思われる。一方毛宗崗本の成立年に關しては、小川博士が康熙丙午(五年)の年が示された『第七才子書』(『琵琶記』)の「総論」の記述を根拠に次のように述べておられる。

毛氏はただ「前歲」とするすのみで、年月を明らかにしてはいないが、ともかく康熙五年以前に「三國志」の評本が完成していたことは事實と認めなければならぬ。

毛宗崗本の成立が康熙五年以前であれば、刊行が康熙九年より遅れるであろう綠蔭堂本は毛宗崗本の祖本とはなりえないことになる。

葉光樓楠槐堂本は孫楷第の目録に「其板刻形式與綠蔭堂本同、唯改眉批爲夾批」とあって、この記述によれば綠蔭堂本から出た本のものである。それならば毛宗崗本の祖本とはなりえない。寶翰樓本は孫楷第の目録に刊行年も所在も記されず、ために検討することができない。その他現存しない『李卓吾先生批評三國志』が存在していた可能性も否定できないので、呉觀明本すなわち毛宗崗本凡例にいう「俗本」であるにわかに断定はできない。しかし毛宗崗本凡例と照合する限り、その可能性はかなり大きいと言えよう。もし呉觀明本そのものでなかったとしても、「俗本」は呉觀明本とほぼ同様の體裁・内容を持った版本に違いあるまい。

## 二

小川博士の指摘のとおり、嘉靖本には見られない關索說話が周曰校本にすでに挿入されている。それでは嘉靖本にはなく周曰校本には存在しているという説話は關索説話だけであろうか。鄭振鐸の「内容實在是一無差別」という断定にもかかわらず筆者の調査によれば、嘉靖本にはなく周曰校本をはじめ呉觀明本・毛宗崗本に見られる話は、關索説話を含めて少なくとも十一を指摘することができる。次にその十一の説話全部の簡単な要約を掲げる。

## (A) 周本卷二「孫策大戰嚴白虎」

王朗は嚴白虎を助けて孫策と戦うが、周瑜・程普に襲われ、衆寡敵せず會稽城に籠城する。孫靜は孫策に會稽城の金銀兵糧が蓄えてある查瀆を襲うよう進言した。王朗・嚴白虎は孫策軍の動きを察知し、城を出て查瀆に向つたところ、孫策軍に襲われる。王朗・嚴白虎軍は敗れ、二人は血路を開いて逃げていった。

## (B) 周本卷四「曹操引兵取壺關」

袁譚は曹操の大軍が押し寄せてくるのを知ると、劉表に救援を求める。劉表は劉備に相談し、劉備は助けても無益であるから手紙を出して断わることを勧める。劉表は袁譚に兄弟仲直りを勧める手紙を、袁尙には曹操討伐を促す手紙を出した。袁譚は劉表に加勢の意思がないことを知った。

## (C) 周本卷九「孔明興兵征孟獲」

南蠻討伐へ向う諸葛孔明の軍中に關索がやってきた。孔明は朝廷に奏上し、關索を先鋒にして出發していった。

## (D) 周本卷十一「孔明火燒木柵寨」

曹叡は孫權が三手に分かれて攻めてきたと知ると、同じく軍を三方に分ち自ら出陣した。陸遜は孫權に魏軍の退路を絶つよう上奏するが、その計略は曹叡の知るところとなった。陸遜は敵の目を欺きながら少しずつ江東へ引き揚げていった。

## (E) 周本卷十一「司馬懿父子秉政」

曹爽の従弟文叔の妻、曹爽が誅せられた後、父夏侯令に再婚を勧められるが、耳を切り鼻を削いで再婚を断る。

(F) 周本卷十二「諸葛瞻大戰鄧艾」

彭和は諸葛瞻の救援を求める書状を持って呉主孫休に謁見。

孫休、丁封・孫異とともに蜀軍の救援に向かう。

(G) 周本卷十二「司馬氏復奪受禪臺」

建寧太守霍戈、成都落城の知らせを聞き哭く。劉禪が洛陽

に入ったと聞いた霍戈は撃つて出ようとするが、諸將の勧め

に従い司馬昭への上奏文を書いて降参。司馬昭、劉禪を責め

るが、霍戈の上奏文を読み、劉禪を許す。

(H) 周本卷十二「羊祜病中薦杜預」

陸凱、上奏して孫皓の無道を諫めるが、孫皓は聞かない。

術士尙廣、庚子歳に孫皓が洛陽に入ると占う。華歆、孫皓を

諫めるが聞かない。孫皓、陸抗に命じて襄陽へ向けて出陣さ

せる。司馬炎、羊祜に命じて敵に備えさせる。羊祜は國境い

を固めて伐つて出ない。陸抗から羊祜に酒が届き、羊祜は疑

わずに飲む。また陸抗が病氣のとき羊祜から薬が届き、陸抗

は疑わずに服す。孫皓から陸抗へ進軍の命が届く。陸抗は上

奏文を認め討つて出るべきではないと述べる。孫皓は陸抗の軍權を剝奪し、孫冀に代えた。

(I) 周本卷十二「羊祜病中薦杜預」

王濬上疏し、孫皓を討つことを勧める。王渾が止めたため

司馬炎は迷うが、杜預の上奏文・張華の進言で、呉討伐を決

意する。

(J) 周本卷十二「王濬計取石頭城」

賈充、司馬炎に撤兵を勧めるが、司馬炎は張華・杜預の進

言に従い、さらに兵を進める。呉軍戦わずして降る。

(K) 周本卷十二「王濬計取石頭城」

呉彦の降参。司馬炎、羊祜を偲ぶ。孫秀、呉の滅亡を嘆く。

一例として右の要約の(B)にあたる説話の部分をも具体的に對比する。(各本間の違いがわかりやすいよう適宜空白をあけた。以下同。)

嘉靖本	周曰校本	吳觀明本	毛宗崗本
<p>操已定冀州、使人探袁譚消息。譚趁時取掠甘陵・安平・渤海・河間等處、聞知尙走中山、連夜攻之。尙兵虛弱、無心戰鬪、聞風而走。尙往幽州、投</p>	<p>操已定冀州、使人探袁譚消息。譚趁時掠取甘寧・安平・渤海・河間等處、聞知尙走中山、連夜攻之。尙兵虛弱、無心戰鬪、聞風而走。尙往幽州、投</p>	<p>操已定冀州、使人探袁譚消息。譚趁時掠取甘陵・安平・渤海・河間等處、聞知尙走中山、連夜攻之。尙兵虛弱、無心戰鬪、聞風而走。尙往幽州、投</p>	<p>操已定冀州、使人探袁譚消息。時譚引兵劫掠甘陵・安平・渤海・河間等處、聞袁尙敗走中山、乃統軍攻之。尙無心戰鬪、逕奔幽州、投</p>

嘉靖本	周曰校本	吳觀明本	毛宗崗本
<p>奔袁熙、袁譚盡收其衆、欲復冀州。操使人召之、譚不至。操大怒、馳書罵以絕其婚。操自統大軍征袁譚、直抵平原。</p>	<p>奔袁熙、袁譚盡收其衆、欲復冀州。操使人召之、譚不至。操大怒、馳書罵以絕其婚。操自統大軍征袁譚、直抵平原。譚聞操自統軍來、遣人求救於劉表。表請玄德商議。玄德曰、今操已破冀州、兵勢正盛。依愚所料、袁氏兄弟不久必爲操所擒耳、況操常有窺荆襄之意、只宜養兵自守、彼雖求援、切莫妄動。表曰、當何以退之。玄德曰、可作書與兄弟二人、以和解爲名、緩緩絕之。表然其言、先遣人以書遣譚曰、君子遠難、不適讐國、交絕不出惡聲。日前聞君屈膝降曹、則是忘先人之讐、棄親戚之好、而爲萬世之戒、遺同盟之恥矣。若冀州不弟、當降志辱身、以濟事爲務。事定之後、使天下平其曲直、不亦爲高義耶。又與袁尙書曰、青州天性峭急、達於曲直、君當先除曹操、以</p>	<p>奔袁熙、袁譚盡收其衆、欲復冀州。操使人召之、譚不至。操大怒、馳書罵以絕其婚。操自統大軍征袁譚、直抵平原。譚聞操自統軍來、遣人求救於劉表。表請玄德商議。玄德曰、今操已破冀州、兵勢正盛。依愚所料、袁氏兄弟不久必爲操所擒耳、況操常有窺荆襄之意、只宜養兵自守、彼雖求援、切莫妄動。表曰、當何以退之。玄德曰、可作書與兄弟二人、以和解爲名、緩緩絕之。表然其言、先遣人以書遣譚曰、君子遠難、不適讐國、交絕不出惡聲。日前聞君屈膝降曹、則是忘先人之讐、棄親戚之好、而爲萬世之戒、遺同盟之恥矣。若冀州不弟、當降志辱身、以濟事爲務。事定之後、使天下平其曲直、不亦爲高義耶。又與袁尙書曰、青州天性峭急、達於曲直、君當先除曹操、以</p>	<p>袁熙。譚盡降其衆、欲復圖冀州。操使人召之、譚不至。操大怒、馳書絕其婚。操自統大軍征之、直抵平原。譚聞操自統軍來、遣人求救於劉表。表請玄德商議。玄德曰、今操已破冀州、兵勢正盛、袁氏兄弟不久必爲操擒、救之無益、況操常有窺荆襄之意、我只養兵自守、未可妄動。表曰、然則何以謝之。玄德曰、可作書與袁氏兄弟、以和解爲名、婉詞謝之。表然其言、先遣人以書遣譚。書略曰、君子遠難、不適讐國。日前聞君屈膝降曹、則是忘先人之讐、棄手足之誼、而遺同盟之恥矣。若冀州不弟、當降心相從。待事定之後、使天下平其曲直、不亦高義耶。又與袁尙書曰、青州天性峭急、迷於曲直。君當先除曹操、以</p>

嘉靖本	周曰校本	吳觀明本	毛宗崗本
<p>譚料非敵、 遂棄平原、走保南皮。 (卷七「曹操引兵取壺關」)</p>	<p>卒先公之恨。事定之後、乃計曲直之分、不亦善乎。若迷而不返、則是韓蘆東郭自困于前、而被田父之獲也。譚得表書看之、知表無發兵意、譚料非操敵、遂棄平原、走保南皮。 (卷四「曹操引兵取壺關」)</p>	<p>卒先公之恨。事定之後、乃計曲直計、不亦善乎。若迷而不返、則是韓蘆東郭自困于前、而被田父之獲也。譚得表書看之、知表無發兵意、譚料非操敵、遂棄平原、走保南皮。 (第三十三回「曹操引兵取壺關」)</p>	<p>卒先公之恨。事定之後、乃計曲直、不亦善乎。若迷而不返、則是韓蘆東郭自困於前、而遭田父之獲也。譚得表書、知表無發兵之意、又自料不能敵操、遂棄平原、走保南皮。 (第三十三回)</p>

右に見るように、周曰校本・吳觀明本・毛宗崗本において、嘉靖本の「直抵平原」と「譚料非敵」の間に新しい話が挿入された形になっている。要約を掲げたすべての十一の説話は、このように嘉靖本に見られず、周曰校本・吳觀明本では挿入されており、さらには毛宗崗本へと受け継がれている。つまり、嘉靖本から毛宗崗本に至る間に、すでに内容に變化があったこと——新しい説話を挿入するという一段階を指摘することができよう。

それでは、これら十一の新たに挿入された説話の來源はどこに求められるのだろうか。

先の要約(C)の關索説話については、これまで論じられてきたように、『花關索傳』にみられるような宋代の頃からの關索についての民間の傳説等が來源となつたものであろう。

それ以外の残り十の説話のもとになつたであろうと思われる記述は、すべて『三國志』およびその裴松之注、『晉書』といった正史に見ることができ、挿入説話は歴史事實としても正しいと考えられていた話なのである。しかしその文章・内容は、正史よりもむしろ『資治通鑑』に非常に近い。次にその一例を示してみよう。要約の(E)、夏侯令の女の話について、周曰校本『三國志』・『資治通鑑』の記述を掲げる。

周曰校本	資治通鑑	三國志(裴注)
<p>時有令女、乃曹爽從弟文叔之妻、乃夏侯令女也。早寡而無子、其父欲改嫁之。</p> <p>耳自誓、居嘗依爽。爽被誅、其家上書與曹氏絕婚、強迎令女歸。</p> <p>後將嫁之。</p> <p>令女又斷去其鼻。</p> <p>其家驚惶、謂之曰、人生世間、如輕塵棲弱草耳、何至自苦如此。且夫家今被司馬氏夷滅已盡、守此欲誰為哉。令女泣曰、吾聞仁者不以盛衰改節、義者不以存亡易心。曹氏前盛之時、尚欲保終、況今滅亡、何忍棄之。此禽獸之行、吾豈為乎。司馬懿聞而賢之、聽使乞子自養為曹氏後。</p> <p>(卷十一「司馬懿父子秉政」)</p>	<p>爽從弟文叔妻夏侯令女、早寡而無子、其父文寧欲嫁之。</p> <p>兩耳以自誓、居常依爽。爽誅、其家上書絕昏、強迎以歸。</p> <p>復將嫁之。</p> <p>令女竊入寢室、引刀自斷其鼻。</p> <p>其家驚惋、謂之曰、人生世間、如輕塵棲弱草耳、何至自苦乃爾。且夫家夷滅已盡、守此欲誰為哉。令女曰、吾聞仁者不以盛衰改節、義者不以存亡易心。曹氏前盛之時、尚欲保終、況今衰亡、何忍棄之。此禽獸之行、吾豈為乎。司馬懿聞而賢之、聽使乞子字養為曹氏後。</p> <p>(卷七十五 魏紀七 即陵厲公嘉平元年)</p>	<p>皇甫謐列女傳曰、爽從弟文叔、妻譙郡夏侯文寧之女、名令女。文叔早死、服闋、自以年少無子、恐家必家已、乃斷髮以為信。其後、家果欲嫁之、令女聞、即復以刀截兩耳、居止常依爽。及爽被誅、曹氏盡死。令女叔父上書與曹氏絕婚、強迎令女歸。時文寧為梁相、憐其少、執義、又曹氏無遺類、冀其意沮、迺微使人諷之。令女歎且泣曰、吾亦惟之、許之是也。家以為信、防之少懈。令女於是竊入寢室、以刀斷鼻、蒙被而臥。其母呼與語、不應、發被視之、血流滿牀席。舉家驚惶、奔往視之、莫不酸鼻。或謂之曰、人生世間、如輕塵棲弱草耳、何至辛苦迺爾、且夫家夷滅已盡、守此欲誰為哉。令女曰、聞仁者不以盛衰改節、義者不以存亡易心。曹氏前盛之時、尚欲保終、況今滅亡、何忍棄之。此禽獸之行、吾豈為乎。司馬宣王聞而嘉之、聽使乞子字養為曹氏後、名顯于世。</p> <p>(卷九 曹爽傳)</p>

『三國志』裴注には、夏侯令女が再嫁させられるのを恐れ髪を切ったとか、令女の父文寧が若くして操を守っている娘を憐んで再婚を勧めたところ令女が承知したので監視を緩めた、という記述が見えるが、『資治通鑑』・周曰校本のどちらにもない。また『三國志』では「文叔早死、服闋、自以年少無子」となっているところが、『資治通鑑』・周曰校本ともに「早寡而無子」であり、さらに『三國志』では「其後、家果欲嫁之」の部分が、『資治通鑑』では「其父文寧欲嫁之、周曰校本では「其父欲改嫁之」となっている。このような例はさらにいくつか指摘でき、新たな挿入説話の文章が『三國志』よりもむしろ『資治通鑑』に近いことが理解できる。つまり挿入説話のもとになった記述は正史に見られるものではあるが、直接正史から取り入れられたものではない。

とはいえ、それが直接『資治通鑑』に基づいたともいえない。『三國演義』は正史『三國志』よりも『十七史詳節』に基づいたと言われているが、それと同様の理由で、周曰校本等における挿入説話も『資治通鑑』系の通俗歴史書に基づいたと考える方が自然であると思う。

元代の頃から『資治通鑑』をもとにした通俗書がかなりの流行を見せており、その流行は明代になっても續いている。<sup>(15)</sup>『寶文堂書目』・『紅雨樓書目』といった明代の私家書

目等を見ると、『通鑑纂要』・『資治通鑑節要』・『通鑑綱領』といった『資治通鑑』の節録書・通俗書と思われる書物が著録されている。嘉靖から萬曆にかけてもこれら『資治通鑑』の通俗書の流行が窺われる。これらは表題に「通鑑」と掲げている以上、『資治通鑑』やあるいは「通鑑紀事本末」・『通鑑綱目』に基づくものだろうから、その文章も正史よりは『資治通鑑』に近いであろう。そして周曰校本等にあとから挿入された説話の文章も正史よりは『資治通鑑』に近いものであった。明中期から後期にかけても比較的流行していた『資治通鑑』に基づく通俗書こそが、挿入説話の直接の母胎であろうことが想定される。しかしその具体相については今後の検討に待ちたい。

### 三

續いて嘉・周・呉・毛各本において、同じ場面・同じ個所の文章や表現がどのように異っているかについて、特に問題となる点を指摘してみたい。文章・表現の違いは、前節で觸れたような内容の違いに比べれば小さなものではあるが、それでも版本の變遷に関しては重要な問題を含んでいると思われる。

荊州の劉表と仲違いをした孫堅は、江東より劉表討伐の兵を擧げた。一方迎え討つ劉表側の大将は劉表の妻蔡夫人

の兄である蔡瑁。蔡瑁は孫堅に戦いを挑んだが、孫堅軍の大將程普に敗れ、襄陽城へ逃げ込んだ。孫堅は襄陽城を圍

んだものの、しばらくは落とせなideいた。

嘉靖本	周日校本	吳觀明本	毛宗崗本
<p>忽一日、狂風驟起、將中軍帥字旗竿吹折。程普曰、此不祥之兆也。邇來帳下見孫堅曰、中軍帥字旗竿被風吹折、於軍不利也、可暫班師。堅曰、吾累戰累勝、取襄陽只在旦夕、豈可因風折旗竿而罷兵。韓當曰、此旗乃軍中之主、亦不可輕易。堅曰、風乃天地呼吸之氣、方今隆冬、朔風暴起、折斷大旗、何足爲怪。吾平生用兵、不信此等異事。只理會得攻城。</p> <p>(卷二「孫堅跨江戰劉表」)</p>	<p>忽一日、狂風驟起、將中軍帥字旗竿吹折。程普曰、此不祥之兆也。邇來帳下見孫堅曰、中軍帥字旗竿被風吹折、於軍不利也、可暫班師。堅曰、吾累戰累勝、取襄陽只在旦夕、豈可因風折斷旗竿而罷兵。韓當曰、此旗乃軍中之主、亦不可輕易。堅曰、風乃天地呼吸之氣、方今隆冬、朔風暴起、折斷大旗、何足爲怪。吾平生用兵、不信此等異事。只理會得攻城。</p> <p>(卷二「孫堅跨江戰劉表」)</p>	<p>忽一日、狂風驟起、將中軍帥字旗竿 被風吹折、于軍不利也、可暫班師。堅曰、吾屢戰屢勝、取襄陽只在旦夕、豈可因風折斷旗竿而罷兵。韓當曰、此旗乃軍中之主、亦不可輕易。堅曰、風乃天地呼吸之氣、方今隆冬、朔風暴起、折斷大旗、何足爲怪。吾平生用兵、不信此等異事。只理會得攻城。</p> <p>(第七回「孫堅跨江戰劉表」)</p>	<p>忽一日、狂風驟起、將中軍帥字旗竿 吹折。韓當曰、此非吉兆、可暫班師。堅曰、吾屢戰屢勝、取襄陽只在旦夕、豈可因風折旗竿、遽爾罷兵。</p> <p>遂不聽韓當之言、攻城愈急。</p> <p>(第七回) (傍點は筆者)</p>

この場面では、嘉靖本と周日校本の記述はほぼ同じと言ってもよいだろう。どちらも、ある日狂風が吹いて本隊の「帥」の字の旗が折れたため、程普は不吉であるから軍を引くよう孫堅に勧めたが孫堅は聞かず、次いで韓當も旗が折れたことの不吉を主帳するが、孫堅はこれにも耳をかさず城を

攻めようとした、という内容である。嘉靖本・周日校本の違いは文字の異同程度でしかない。しかし吳觀明本では少々事情が異なる。嘉靖本・周日校本の「狂風驟起、將中軍帥字旗竿吹折。程普曰、此不祥之兆也。邇來帳下、見孫堅曰、中軍帥字旗竿被風吹折」の

部分が、呉観明本では「狂風驟起、將中軍帥字旗竿被風吹折」となっている。これは嘉靖本・周曰校本の「中軍帥字旗竿吹折。程普曰、此不祥之兆也。逕來帳下、見孫堅曰」のおよそ二十五文字が呉観明本において脱落したものである。おそらく嘉靖本・周曰校本の文章中に「中軍帥字旗竿」の六文字が二度出てくるために、呉観明本では「中軍帥字旗竿」という六文字に挟まれる部分とその六文字の一方を誤って欠いたのである。そのために呉観明本では文章が前後で繋がりず、讀めなくなっている。

そこで毛宗崗本を見ると、呉観明本で脱落していた二十五文字は毛宗崗本にもない。嘉靖本・周曰校本では本來その二十五文字に續いてあつた程普のセリフ「於軍不利也、可暫班師」は、毛宗崗本では「此非吉兆、可暫班師」と改めてこれを韓當のセリフにしている。そして嘉・周・呉各本ではさらに續いてあつた孫堅と韓當のやりとりは毛宗崗

本では取り去られている。取り去ったかわりに、先の誰ものかわからない（本來は程普の）セリフのところは韓當の名前を持ってきた。毛宗崗本でこのような修訂が行われたのは、單に嘉靖本や周曰校本の文章を簡略にしたのであるまい。毛宗崗本が基づいたテキストは呉観明本またはそれと同様の文章の脱落を含むテキストであつて、その脱落のために讀めなくなった部分のつじつまをあわせようとしたためではないだろうか。このことから、毛宗崗本の成立に先んじて呉観明本（もしくはその類似本）が存在していたことが指摘できよう。

もうひとつ別の例を挙げておく。場面は、劉備が關羽・張飛の仇を討つために蜀の國中の兵力を傾けて呉へ攻めよせようとしているという知らせを聞いた孫權は、和睦の使者として諸葛孔明の實の兄諸葛瑾（字は子瑜）を成都に派遣した、というところである。

嘉靖本	周曰校本	呉観明本	毛宗崗本
却説、張昭入見孫權曰、諸葛子瑜知蜀兵勢大、故推作使而去、必降玄德矣。 權 曰、不然。孤與子瑜、有生死不易之盟。子瑜不負於孤、孤	却説、張昭入見孫堅曰、諸葛子瑜知蜀兵勢大、 瑜知蜀兵勢大、 有生死	却説、張昭入見孫權曰、諸葛子瑜知蜀兵勢大、故假以講和爲辭、欲背吳入蜀。此去必不回矣。權曰、孤與子瑜、有生死不易之盟。子瑜不負於孤、孤	却説、張昭見孫權曰、諸葛子瑜知蜀兵勢大、故假以講和爲辭、欲背吳入蜀。此去必不回矣。權曰、孤與子瑜、有生死不易之盟。孤不負子瑜、

ここで嘉靖本と周曰校本の文章を比較すると、嘉靖本の「故推作使而去、必降玄德矣。權曰、不然、孤與子瑜」という十九文字が周曰校本では脱落している。そのため周曰校本のままでは文章が續かず、讀めなくなっている。そこで吳觀明本では、周曰校本で脱落のあったところに「故假以講和爲辭、欲背吳入蜀、此去必不回矣。權曰、孤與子瑜」という表現を補つて文章のつじつまをあわせている。そして吳觀明本で補われた文章はそのまま毛宗崗本に受け継がれている。ここからも毛宗崗本の成立に先だつて吳觀明本が存在していたことが確認できる。また周曰校本で脱落のあった部分において、嘉靖本の本來の文章と吳觀明本で補われた文章を比較すると、内容こそ大差ないが、それぞれに用いられている語彙には大きな開きがみられる。これは吳觀明本において嘉靖本の文章を改めたためではなく、吳觀明本に先んずる周曰校本に誤りがあり、その誤りを嘉靖本とは別のところで訂正したことによって生じた相違で

嘉靖本	不負於子瑜也。昔日、子瑜在柴桑時、孔明來吳、孤語子瑜曰、…… (卷十七「吳臣趙咨說曹不」)
周曰校本	不負於子瑜也。昔日、子瑜在柴桑時、孔明來吳、孤語子瑜曰、…… (卷九「吳臣趙咨說曹不」)
吳觀明本	不負于子瑜也。昔日、子瑜在柴桑時、孔明來吳、孤語子瑜曰、…… (第八十二回「吳臣趙咨說曹不」)
毛宗崗本	子瑜亦不負孤。昔、子瑜在柴桑時、孔明來吳、孤欲使子瑜留之。…… (第八十二回)

あろう。したがって吳觀明本の成立に先んじて周曰校本が存在していたことがわかる。

以上述べてきた各本間における文章・表現の違いと前節で觸れた新しい説話の挿入の場合、嘉靖本と毛宗崗本を比べれば当然内容や文章が異っている。しかしそれらの相違は毛宗崗本が嘉靖本の文章を修訂した結果ではない。確かに嘉靖本・周曰校本・吳觀明本の三種とも同様の文章・表現をしており毛宗崗本で大きく手が加えられた箇所も多いが、嘉靖本と毛宗崗本の相違はただそうして生じたものだけではない。毛宗崗本が成立する以前には少なくとも周曰校本・吳觀明本という二段階があり、それを經て毛宗崗本が成立した。そしてこの二段階は内容や文章・表現についての變化でもあつて、さらに毛宗崗本が底本に對してどのような修訂を行ったかという<sup>(16)</sup>ことにも關わる大きな意味を持っていたのである。

これまで取り上げてきた四種の版本の他に、福建の建安で出版された『三國志傳』と呼ばれる二十巻本が存在する。この建安二十巻本は毛宗崗本が成立していく過程に對してどのように位置づけられるのだろうか。この點について建

安二十巻本系の代表的刊本として余象斗本を取り上げて考えていくことにする。  
まず第一の例。場面は、袁術と呂布が縁談を結んで劉備と敵対しようとしていると、陳珪が袁術と呂布の縁談を成立させまいとして、呂布に破談を勧めるところである。

嘉 靖 本	余 象 斗 本
<p>遂扶病見布。布曰、大夫何來。珪曰、聞將軍死至、特來吊喪。布驚曰、何故出此言。</p> <p>珪曰、前者袁公路以金帛送公、欲殺玄德、公射戟解之。術來求親、其中欲公女爲質、隨後便來取玄德首級。否、必來求借錢糧、或求協助、公必允之。早晚造反、公乃反賊親屬也。</p> <p>(卷四「呂奉先轅門射戟」)</p>	<p>遂扶病見布。布曰、大夫何來。珪曰、聞將軍死、某特來吊喪。布驚曰、何故出此言。珪曰、今日聞將軍嫁女與袁術、此取死之道也。布問其故。珪曰、前者袁術以金帛送公、欲殺劉備、公射戟解之。術求親、其中欲公女爲質、隨後便來取劉備首級了、必借錢糧、又求協助、公必允之。早晚造反、公乃反賊親屬也。</p> <p>(卷三「呂布轅門射戟」)</p>

嘉靖本と余象斗本の記述を比較すると、余象斗本の「珪曰、今日聞將軍嫁女與袁術、此取死之道也。布問其故。」の二十二字が嘉靖本では脱落している。この脱落により嘉靖本の文章が讀めなくなっているのではないが、内容としては余象斗本の方が優れていると思う。しかも嘉靖本で脱落している部分は二度現われる「珪曰」という二文字に挟ま

文章が考えられる。嘉靖本と余象斗本を比較した場合、余象斗本は嘉靖本よりも刊行が遅れる版本であるにもかかわらず、嘉靖本にこのような脱落が意外と多く見られる。これは余象斗本が嘉靖本の文章を正したというよりは、嘉靖本の誤りであろう。こういった現象が見られるのは、嘉靖本と余象斗本に共通するより古い祖本があつて、その祖本から嘉靖本が生じる段階で文章の一部を書き落とすという誤

りが生じ、一方余象斗本は誤りを生ずることなく祖本の文章を受けついでいたためではないか。つまり余象斗本や他の建安二十卷本は、嘉靖本や毛宗崗本が成立する過程とは別の系統に位置する版本なのではないかと思われる。それと同時に建安二十卷本の方が嘉靖本よりも古い形を留め

ているとも言えよう。

余象斗本の方が嘉靖本よりも古い形を留めていると思われる例をもう一つ挙げておこう。場面は、董卓が少帝を廢して新しい皇帝を擁立しようとしたが、盧植が止めたところである。『資治通鑑』の記述もあわせて示す。

嘉 靖 本	余 象 斗 本	資 治 通 鑑
董卓大怒、拔劔向前、欲殺植。侍中蔡邕・議郎彭伯諫曰、盧尚書海內大儒、人之望也。今先害之、天下震怖。卓乃止、但免植官、遂逃難而隱於上谷。 (卷一「呂布刺殺丁建陽」)	董卓大怒、拔劔向前、欲殺盧植。百官皆拜於地而告免。植曰、我非募爵祿而久戀洛陽、乃不忍漢天下到此廢矣。長嘆而出逃難而去、隱於山谷。 (卷一「呂布刺殺丁建陽」)	卓大怒、罷坐。將殺植、蔡邕爲之請、議郎彭伯亦諫卓曰、盧尚書海內大儒、人之望也。今先害之、天下震怖。卓乃止、但免植官、植遂隱於上谷。 (卷五十九 漢紀五十一 靈帝中平六年)

嘉靖本では、盧植を殺そうとした董卓を蔡邕・彭伯の二人が諫言して止めると、盧植は官を捨てて難を避けた、となつている。一方余象斗本は、盧植を殺そうとした董卓を百官が止め、盧植は漢王朝の滅亡を嘆きながら出ていき、山谷に隠れた、という内容である。同じ場面でも嘉靖本と余象斗本で文章が大きく異っている。そこで、『資治通鑑』を見ると、蔡邕・彭伯が現われること、彭伯の諫言、盧植が上谷に隠れること、どれも嘉靖本と内容が一致し、文章も非常に近い。しかも嘉靖本のこの場面において、蔡邕・彭伯は前後と何の脈絡もなく突如として現われており、特

に彭伯はこの場面に一度名前が出たきりもう二度と登場することはない。これは嘉靖本がより古いテキストを書き改めるにあたって、『資治通鑑』かあるいはそれに類する歴史書をそのまま引用したことによるのではないだろうか。一方で余象斗本の方はより古いテキストの文章をそのまま受け継いだ、つまり余象斗本のほうが嘉靖本よりも古い形を留めていると思われるのである。

以上のことから、嘉靖本よりも古く、より羅貫中の原作に近い祖本が想定できる。嘉靖本は現存する『三國演義』の版本中の古本ではあっても、決して最も優れたテキスト

とは言えないし、また羅貫中の原作に最も近いものでもないのである。

五

従来周曰校本は嘉靖本を底本とし、それに關素説話や「考證」・「釋義」・「補注」等を増補したものとされてきた。

しかし實はその他にも新しい説話が挿入されていることについては先に述べた。そして文章・表現について言えば、大半は嘉靖本と周曰校本では一致し、その違いは比較的少ないと言えるが、しかし少ないながらも兩者の表現の違いは重大な問題を抱えていると思われる。たとえば次のような例。

嘉靖本	周曰校本	余象斗本
却説、玄徳知袁術已喪、寫表申朝、書呈曹操、令朱靈・路昭回許都、	却説、玄徳知袁術已喪、寫表申朝、書呈曹操、令朱靈・路昭回許都、留下軍馬、保守徐州。玄徳見一路人民流散、隨處招諭復業、來還徐州。朱靈・路昭回許都、見	却説、玄徳知袁術已死、寫表申朝、書呈與操、令朱陵・路招回許、留下軍馬、保守徐州。玄徳見於路人民流散、隨處招諭復業、來還徐州。朱陵・路招到許、
曹操説、玄徳留下軍馬。曹公欲斬二人。 (卷五「關雲長襲斬車胄」)	曹操説、玄徳留下軍馬。曹公欲斬二人。 (卷三「關雲長襲斬車胄」)	説、玄徳留下軍。操欲斬二人。 (卷四「關雲長襲斬車胄」)

ここで嘉靖本と周曰校本を比較すると、周曰校本の「留下軍馬、保守徐州。玄徳見一路人民流散、隨處招諭復業、來還徐州。朱靈・路昭回許都」の三十四文字が嘉靖本では脱落している。そして余象斗本の同じ箇所を見ると、嘉靖本で脱落し周曰校本で見られた三十四文字は、多少の文字の異同はあるけれども、ほぼ同じ形で余象斗本にも見られる。つまりこの場面の文章は、嘉靖本では脱落したより古いと思われる文章が、系統の異なるはずの周曰校本・余象斗本

それぞれに同じ形で見られるのである。しかも嘉靖本における脱落は、周曰校本でいえば、二度現われる「朱靈路昭回許都」の七文字に挟まれる部分とその七文字の一方である。前後二度現われる同じ七文字の混同によって生じた脱落であると考えられる。こういった嘉靖本の脱落は、嘉・周・余各本を比較したときに、この場面以外にもいくつか指摘できる。もうひとつの別の例を挙げてみよう。

嘉 靖 本	周 曰 校 本	余 象 斗 本
<p>玄德引馬軍直衝過去。張寶就馬上披髮仗劍作用。風雨大作、黑氣冲天、無限人馬、自天而降、玄德急回、軍兵大亂、被張寶殺敗、退見朱鳥。鳥曰、此妖術也、來日、宰猪羊取血、令軍伏於山上、候戰、趕到、乘高、潑之、其法可解。</p> <p>(卷一「安喜張飛鞭督郵」)</p>	<p>玄德引 軍直衝過去。張寶就馬上披髮仗劍作法、風雷大作、黑氣中、無限人馬、自天而降。玄德急回、軍 大亂、被張寶殺敗、退見朱鳥。鳥曰、此妖術也、來日、可宰猪羊血、令軍士伏於山頭、候賊、趕來、高坡上潑之、其法可解。</p> <p>(卷一「安喜張飛鞭督郵」)</p>	<p>玄德引軍 撞過去。張寶就馬上披髮仗劍作法、風雷大作、黑氣中、無限人馬、自天而降。玄德急回、軍 大亂、被張寶殺敗、退見朱鳥。鳥曰、此妖術也、來日、可宰猪羊血、令軍士伏於山頭、候賊、趕來、高坡上潑之、其法可解。</p> <p>(卷一「安喜縣張飛鞭督郵」)</p> <p>(傍點・圈點は筆者)</p>

この例では、使用されている語彙など細かい點で嘉靖本と周曰校本の間で違いが見られ、かつその場合周曰校本と余象斗本で同じになっている。たとえば嘉靖本の「作用」が周・余兩本とも「作法」に、同じく「風雨」が「風雷」に、などのごときものである。

こうした例が見られる一方で、嘉・周・余各本の間には次のようなことも指摘できる。前節で觸れた呂布と袁術の縁組みを陳珪が取りやめさせようとする場面では、嘉靖本と余象斗本を比較することにより嘉靖本に脱落のあることが指摘できたが、周曰校本の該當する箇所を見ると、嘉靖本と一字一句違わないのである。

つまり嘉靖本と余象斗本の文章が異っている部分を周曰

校本と照合すると、周曰校本は余象斗本の方に一致する場合と嘉靖本の方に一致する場合の両様がある。周曰校本にこのような相反する現象が存在することは何を意味しているのだろうか。

嘉靖本の冒頭に附される弘治甲寅の庸愚子の序には次のような記述がある。

若東原羅貫中以平陽陳壽傳、攷諸國史、自漢靈帝中平元年、終於晉太康元年之事、留心損益、目之曰、『三國志通俗演義』。(中略) 書成、士君子之好事者、爭相贖錄、以便觀覽、……

この序文から考えるに、『三國演義』が刊本として登場するまでは寫本の形で流布していたことであろう。寫本である以上、もとの本の文章をなるべく忠實に書き寫そうとする

一方、同音・近似音の文字を書き誤ったりある一節を書き落したりすることもままあったであろう。そうして全體の内容こそ大きな變化はないが、細かい部分に到つては、あるものは本来の正しい文章を傳へあるものは書き損じや文章の脱落を含んだといった様々な『三國志通俗演義』の寫本が登場したのではないだろうか。その中の比較的誤りの多い寫本をもって刊本の形となつて世に現われたのが嘉靖本であり、それとは別の嘉靖本に基づいたものよりは誤りは少ない寫本をもとに、さらにいくつかの説話や「考證」「釋義」・「補注」などを加えて刊本となつたのが周曰校本なのでないだろうか。だからこそ嘉靖本と周曰校本とはほぼ同系統の文章でありながら、ある場合には周曰校本と建安二十卷本が同様の表現をして嘉靖本とは異つていとう現象が生じたのではないかと思う。

建安二十卷本は『三國志通俗演義』の寫本よりもより原作に近い段階で分かれ出、後になつて關索説話等を取り込んで余象斗本等の諸本が生まれたのであろう。そして前節で指摘した嘉靖本の歴史書による書きかえは、嘉靖本の段階で行われたのではなく、より原作に近いところから『三國志通俗演義』の寫本が書かれる段階で行われたものである。嘉靖本・周曰校本・余象斗本の三種の版本は、途中に様々な段階があるにせよ、もとをたどればあるひとつの

本から三本それぞれに分かれ出た版本ではないかと思ふ。

毛宗崗本の成立に先だつて周曰校本・吳觀明本が存在していた。その中の一つである周曰校本が嘉靖本と縦の關係でないのであれば、必然毛宗崗本の祖本を溯つても嘉靖本には行きつかないことになる。毛宗崗本の成立過程から言へば、嘉靖本は周曰校本以前の『三國演義』の形をある程度示している版本に過ぎないのである。

以上のことから、『三國演義』の版本の變遷は、およそ次のような圖式が考えられよう。



確かに現在のところ、周曰校本は嘉靖本をもとにした版本であるという可能性も完全には否定できまい。しかしながら先に示したような例からすると、嘉靖本と周曰校本は別々の寫本からそれぞれ派生した二つの刊本である可能性も十分考慮されるべきではないだろうか。

## 結

本稿では、現存する『三國演義』のわずか五種の版本を用いて毛宗崗本が成立していく過程を探ってみた。この五種の版本を考察しただけでも毛宗崗本が成立するまでには様々な段階があることが理解できる。現存する版本はこの五種の他にも数多くあるし、また現存する版本が明清の間に刊行された『三國演義』の版本すべてというのではもとよりない。このような現在知られていない版本の存在まで考慮に入れると、毛宗崗本の成立過程や『三國演義』各版本相互の関わりはかなり複雑なものであろうことは容易に想像できる。

従来『三國演義』の版本については、嘉靖本と毛宗崗本以外はほとんど議論の対象にならなかった。しかし嘉靖本・毛宗崗本以外の版本を少しく検討すれば、そこにはこれまでに気づかなかった様々な問題が現われてくる。すなわち嘉靖本を基礎にして毛宗崗本が成立したというような單純なことは決してない。羅貫中の原作から広く流布した毛宗崗本が成立するまでには、様々な経過・過程が重層的に累積されているのである。したがってその過程に位置づけられる諸版本は、『三國演義』の版本の變遷に關して大きな問題を抱えているのであり、それらを改めて評価し直さなければならぬ。

ればならない。

本稿において、このような観点から毛宗崗本の成立過程の一端を明らかにし得たとは思いますが、その全面的な解明は今後の大きな課題であらう。

## 注

(1) 嘉靖壬午の序文を欠くテキストのほうが先に発見されたため、かつて「弘治本」と呼ばれていたこともあった。その後嘉靖壬午の序文の発見により、「嘉靖本」と呼ばれるようになった。本稿においても「嘉靖本」と呼ぶことにする。

(2) 「小説月報」二十卷十號、一九二九年。

(3) 「關索の傳説そのほか」(岩波書店刊『中國小説史の研究』所收。原載は、小川・金田譯、岩波文庫(舊版)『三國志』第八冊附録)。

(4) 最近になって鄭振鐸以來の定説に疑問を呈する研究もあらわれてきた。それについては、金文京『『三國演義』版本試探——建安諸本を中心に』(『集刊東洋學』本號所載)の注(5)を参照。しかしそこに紹介されている研究もなお不十分である。

(5) 以下のうち、三の「呉觀明本」・五の「余象斗本」の簡介については、注(4)前掲の金氏の論文参照。

(6) 建安二十卷本については注(4)前掲の金氏の論文参照。

(7) 小川環樹譯、岩波文庫(舊版)『三國志』第一冊解説。なおこの部分は、『中國小説史の研究』所收『三國演義』の發展のあとには未載。

(8) 各巻頭に「李卓吾先生批評三國志」とあるほか、封面には「刻李卓吾批點三國志全像百廿回」と題される。またこの「李卓吾」

が假託であることについては、陸聯星「李贄批評」(『三國演義』辨偽)、「光明日報」一九六三年四月七日) 参照。

(9) 毛宗崗本凡例第七條に、

俗本之尤可笑者、於事之是者、則圈點之、於事之非者、則塗抹之、不論其文、而論其事。

とある。

(10) 綠蔭堂本冒頭の目録では、「劉玄德」の「玄」を「玄」と欠筆にしている。(本文は欠筆にしない) また同じく目録において、第一百一回第二則の題が「木門道奪射張郃」となっている。呉觀明本の同じ個所を見ると「奪」は「弩」の刻し間違ひであることがわかる。

(11) 小川環樹「『三國演義』の毛聲山批評本と李笠翁本」(『中國小説史の研究』所収。原載は「神田博士還曆記念書誌學論集」)。

(12) 關索については注(3)前掲論文の他、周紹良「關索考」(『學林漫録』第二集)、金文京他「花關索傳の研究」(汲古書院、平成元年)参照。

(13) 周曰校本卷十一「諸葛亮六出祁山」の、關羽の次男關興が死んだくだりのところで「補注」として、

按逸史、前載關索隨孔明平定南方、回成都、臥病不起。后□□入本傳、恐難以取信於人。當時皆指關興是關索、非也。

往々傳說雲南四川等處、皆有關索之廟。細考之、索的是蜀將也。小説中直以爲關羽之子、其傳必有所本矣。今略附於此、以候後之知者。

とある。周曰校本において、關索は正史等の歴史書にこそ現われないが、その傳説にはきちんと基づくところがあった、と考えられているようである。

(14) 小川環樹「『三國演義』の本づいた歴史書」(『中國小説史の

研究』所収。原載は「東洋の文化と社會」第二輯)。

(15) この點は金文京氏の御指摘による。

(16) 毛宗崗本に先んじて存在したのは周曰校本と呉觀明本だけとは限らない。周曰校本や呉觀明本と同系統の版本と思われるものに夏振宇本・鄭以禎本があり、これらも毛宗崗本が成立するまでの一段階である可能性がある。